

【研究ノート】

文学館と「地域のゆかり」 大津の石山寺を事例として

Bungakukan and “region connection” - in case study of the Ishiyama temple

渡邊 真衣*

Mai WATANABE

はじめに

文学館にはその設立地域を舞台にした作品など「地域ゆかりの文学」という主題を掲げる館が存在する。作品と地域が結びついている場合、創作主体である作家本人もその地に何らかの「ゆかり」を持つ場合が多いが、いわゆる大衆小説などには作家と無関係に特定地域と作品が結びつく例もある。

近年では文学作品のゆかりを利用した観光振興の例も増加し、取り組みの一環として文学館を利用(時には新設)するものも見られるが、このような動きは決して長くない文学館史の中でも、比較的最近始まったものである。その発端は政府による観光振興政策に求めることもできるが、ある地域が特定の文学作品と結びつけて認識されること、また地域自体が自らの個性として魅力的な文学作品を取り入れ、「文学ゆかりの地」として宣伝する例は、近代に文学館が成立する以前から存在している。

本稿では文学と地域の結びつきを文学館の基盤をなす要素の一つと考え、事例として中世より源氏物語ゆかりの地として知られる、滋賀県大津市の石山寺を挙げる。

1. 文学館と「地域のゆかり」

地域ゆかりの文学をテーマとして観光振興を行う事例には、京都府宇治市の「源氏物語のまちづくり」、愛媛県松山市の「坂の上の雲のまちづくり」、岩手県花巻市の「賢治星めぐりの街活性化事業」などがあり、いずれも地域ゆかりの作品紹介に留まらず、作品を地域の個性として魅力的なまちづくりを行い、観光客を誘致するものである。

この中には、取り組みの一環としてテーマとなる作品に関するミュージアム(博物館および類似施設)が設置される例も見られる。例えば宇治市では「源氏物語ミュージアム」(1998)、松山市では「坂の上の雲ミュージアム」(2007)がまちづくりの中核施設として計画の段階から構想されており、花巻市は新たな文学館が設置されることはないが「賢治童話のふるさと」として多くの旅行者を集め、「宮沢賢治記念館」(1982)を始めとする多くの関連施設を有する。

地域の事業と結びついたケースを除いても、文学館は地域の「ゆかり」と結びついて設置される例が多い。「日本近代文学館」など、一分野の資料を包括的に収集する施設(註1)はその限りではないが、例えば都道府県・市町村など地域とそのゆかりの文学(作品・作家)を関連付けて紹介する、いわゆる「地方文学館」は全国に存在する(註2)。これらの施設は1967年の

*國學院大學大学院

日本近代文学館および東京都立近代文学博物館(2002年閉館)の設立を契機として、間を空けつつ全国に普及している。この時期は前後して日本近代文学館が設立され、これをきっかけとして「文学館」の名称が一般化するなど、文学館という概念が成立した時期でもある。

文学館が作家および作品と全く無関係の地域に設置される例は稀であって、ゆかりの文学者とその作品を紹介することで地域の歴史・文化を伝える地域の総合文学館はもちろん文学者個人の記念館も、なんらかの関係がある地域に設置される。

文学館が地域のゆかりに関連して設立されることは、決して不自然ではない。とくに文学者個人を記念・顕彰しようという個人記念館設立の動きは、ゆかりの地だからこそ生まれるものであり、また全国的に見て知名度のない人物であれば、その足跡の残るゆかりの地域を離れて文学館を設立しようという動きが生まれることもない。個人をテーマとする文学館の設立契機には、本人や関係者による資料の寄贈を受けて設置される例が多く見られ、新設の文学館に限らず既存の図書館や文学館で受け入れられることも多いが、このような繋がりも地域と文学者のゆかりがあってこそ生まれるものであろう。

しかし、作者ゆかりの地が必ずしも文学的な業績に繋がるとは限らない。中村稔は1999年4月における日本文学館協議会の「文学館の総務に関する共同討議」において、日本におけるフランス文学撰取の中から独自の文学を形成した中原中也などを例に挙げて「ゆかり」にどこまで縛られる必要があるのかという疑問を呈している(全国文学館協議会 1999 pp4-19)。文学者と「ゆかりの地」との関係には、出身地(出生地)、家(生家・自宅・別荘)の所在地、一時滞在した場所などが挙げられるが、これらの土地が直接文学的な業績に結びつくとは限らないことは、中村が指摘する通りである。

程度の差はあっても、文学者ゆかりの地に存在する文化・歴史・風土が文学活動に影響を与えることは否定できない。長谷川泉は自ら提唱した70則の文学鑑賞法の中で、「地理的、自然環境的な要因」である風土・自然環境など、地域に関する要素を取り上げている(長谷川泉 1977 pp1099-1128)。また久松潜一は文学と歴史・風土の関連を究明する試みを行い、ある歴史時代・ある風土的環境の中に存在し生活する作家は、これらの要素から性格や生活に影響を受けること、故に歴史・風土は文学を形成する地盤になっていることを指摘した(久松潜一 1951 pp33-42)。しかしこれらの要素も文学を構成する要素の一部に過ぎず、また現代社会においては人間と文学の関係性にも変化が見られる。

長谷章久は風土と人間性を結びつける一因として廃藩置県まで続く古代の行政区画を挙げ、生まれた土地を離れずに一生を送る一般の民衆に、各地の風土・風景が強く作用して独自の住民性を形成するプロセスを明らかにした。更にこのような時代は作家の性質にも著しい地域差が存在したことを述べているが(長谷章久 1968 pp35-55)、これと交通と情報の流通が発達した近現代における地域風土と人間の繋がりと同列に論じては、ナンセンスの謗りを免れえないであろう。近現代においては複数の「ゆかりの地」を持つ文学者は多い。例えば井上靖の記念館は出生地である北海道旭川市の井上靖記念館をはじめ、出身地、小説の舞台、家族の疎開先など、全国に五館が存在する。

また全体から見れば少数ではあるが、「文学者ゆかりの地」のほかに「文学作品ゆかりの地」という切り口も存在する。作品の舞台となった場所や影響を与えた土地など作品と直接結びついた土地がそれであり、地域の歴史や人物に取材した歴史小説などには、作者と直接の関係を持たないケースも多い。司馬遼太郎と『坂の上の雲』の主人公たちの故郷である愛媛県松山市(伊予)、また同じく歴史・時代小説家として知られる池波正太郎と代表作品群である「真田物」ゆかりの長野県上田市の関係がこれに当たる。文学作品は創造者である文学者と切り離せないものであり、この両者を明確に区別することは難しい。湯治場として多くの文士に愛された箱根・湯河原、避暑地として人気の高い軽井沢、多くの文士が移り住んだ鎌倉など、多くの「ゆかりの作品」を生み出した作者ゆかりの地といった例もある。

以上のように「地域のゆかり」という括りはひどく曖昧なものである。文学は地域を越えて伝播するものであり、文学的所産は地域のゆかりで説明し尽くせるものではない。作者が作品中にどれほど「ゆかりの地」を反映させるかは作家ごと、また作品ごとに異なるのである。

また近年では、文学作品を主題とする文学館も見られるようになった。文学者個人(作家・文筆家・文学研究者など)の記念館は文学館の成立における初期の段階から数多く存在している(註3)が、文学者の記念館に対して、作品単体を取り上げて文学館を作る例はまだ少なく、先述の源氏物語ミュージアム・坂の上の雲ミュージアムの他に、長野県上田市の「池波正太郎真田太平館」(1998年)、青森県北津軽郡の「小説「津軽」の像記念館」(1996年)、神奈川県(箱根)の「TBS 箱根サン = テグジュペリ星の王子様ミュージアム」(1999年)、奈良県(明日香村)の奈良県立万葉文化館(2001)などがある。これらは

- ①幅広い読者の支持を集めている、または実際に読んだことがなくとも誰もが作品・作者を知っているような知名度の高い作品を主題とする
- ②作品の舞台であるなど、設立された地域と作品の間に何らかのゆかりがある
- ③作品世界の再現および追体験を主な機能とする

などの特徴をもつものが大半である。

なお星の王子様ミュージアムは地域とのゆかりを持たないが、観光地の呼び物として、敢えて非日常かつ魅力あるテーマを設定している例といえる。魅力的かつ普遍性のあるテーマであれば、地域と繋がりが薄いもしくは無関係であっても設定される例はあり、この傾向は特に観光客の誘致を主目的とする施設に強い。磯原直道はこれらの、名前に博物館・記念館・ミュージアムなどを冠してミュージアム的な展示施設を持つが、集客力の高いテーマに沿ってエンターテインメントやサービスを提供することを第一義とする施設を「観光型ミュージアム」と呼び、1990年代後半から増加傾向にあることを報告している。(磯原直道 2000 pp107-113)。

このように「～ゆかりの地」を作り出す機能は観光学において、ジョン・アーリの「観光のまなざし(The tourist gaze)」を用いて次のように説明される(ジョン・アーリ 1995 pp5-6)。

観光客はあらかじめ作り上げられたイメージを抱いて観光地を訪れ、構造化された視線を向ける。観光地側もそれに対応して(時には自発的に)イメージを作り出す。これが相互に作用することで、観光地のイメージが形成されていく。

観光のまなざしの特徴としては、

- ①映画、テレビ、文学、雑誌、レコード、ビデオなどのメディアによって作られ、強化される。
- ②日常のありふれたものとは異なる(と判断される)視覚的要素に反応し、さらに写真、絵葉書、映画、模型などで確認されることで再生産・再把握を繰り返す。
- ③メディアの作り出した記号(註4)によって構成される。

などが挙げられる。意図的か否かはさておき、文学館を含めた文学をテーマとする観光は全て、この機能を利用して成立するといえる。観光客が求めるのは「作者の思想を育んだ」「主人公たちが駆け抜けた」土地を訪れる、または「作品世界にあそぶ」ことであって、そのイメージを崩されることは望まない。設置者側も、訪れる人が作品世界に思いを馳せることを期待して、地域ゆかりの文学を観光資源として掘り起こすのである。

地域と文学を結び付けて観光振興に繋げる動きの始まりは、近年ならば2003年頃からの政府による観光振興政策および各地のまちおこし運動に見ることもできるが(註5)、特定の地域と文学が結びついて文学および文学者の「ゆかりの地」とされる例はより古くから存在している。古くは歌枕の伝統などがそれに当たるであろうし、更にもその場所で歌碑が建立されるなど、文学のゆかりを視覚化する展示施設が作られる(時には既存の施設が利用される)こともある。

先に挙げた作品主題の文学館のように、作品世界を疑似体験することで楽しむ、また身近な存在として親しむ施設のあり方は、このあり方と類似していないだろうか。

2. 文学と観光の事例(源氏物語と石山寺)

古くから存在した文学作品を利用した観光振興事例の一例として、滋賀県大津市の石山寺を挙げる。室町時代から「源氏物語執筆の地」として知られるこの古刹は、紫式部の自宅跡である廬山寺と共に源氏物語と紫式部ゆかりの寺として知られており(ただし本人が参詣したことを証明する資料はない)、アーリの定義に従うなら、源氏物語に関する文学的な記号といえる。

大本山石山寺(真言宗)は(註6)、天平19(747)年に良辨によって建立され、その後弓削法王(道鏡)によって大規模な造営が進められた。道鏡の失脚後は一時廃れるが、石山内供淳祐(890-953)によって再興された。この頃から権勢と無関係な学究的伝統が成立し、平安時代以来学問・文化の場として貴族たちにも信仰されていたことは、石山寺縁起絵巻などにも伺える。

その歴史的背景、また地理的環境から政治的な権力闘争に巻き込まれることが無かった為、石山寺には多くの文化財や古い建造物が現存している。紫式部が源氏物語を執筆したと伝えられる「源氏の間」を有する本堂(国宝)は、永暦2(1078)年に一度焼失し、永長元(1096)

年に再建。また慶長7(1602)年には淀君の寄進で礼堂が加えられている。そのため本堂は平安様式、外陣は桃山様式とはっきり分かれ、「源氏の間」も書院造となっている。ただし古材の転用状況などから慶長年間の工事は新築ではなく解体補修であったと推測されており、ほぼ新築された礼堂もまた、元の姿からあまり変更されること無く建てられたと考えられている。

紫式部が石山寺で源氏物語の着想を得た(または執筆した)という、いわゆる石山寺起筆伝説と「源氏の間」について、『石山寺縁起絵巻』巻4第1段には、次のように記されている。紫式部は右少弁藤原為時朝臣か女(むすめ)上東門院(彰子)の女房にて侍けるに一条院の御をは選子内親王よりめつらしからん物語や侍と女院へ申されたりけるを式部におほせられてつくらせられければこの事を祈申さむとて当寺(石山寺)に七ヶ日こもり侍けるに水うみのかたはるはると見わたされて心すみてさまさまの風情眼にさへきり心にかみかけるをとりあへぬ程にて料紙などの用意もなかりければ大般若の料紙の内陣にありけるを心の中に本尊に申うけて思あへぬ風情を書きつ、ける彼罪障懺悔のために大般若経を一部かきて奉納しけるいまに当寺にありとそこの物語かきけるところは源氏の間と名つけてその所かはらすそ有なる(以下略)

このエピソードを収録する第4巻は、全7巻からなる石山寺縁起絵巻のうち室町時代に補写されたものだが、内容的には鎌倉の正中年間(1320-1324)に作られた元本(当時の作は1、2、3、5巻が残る)とほぼ同一と考えられている(梅津次郎 1963,1966)。記述にある「源氏の間」は本堂にむかって右手の一室であり、現在は紫式部の人形と調度品などが展示されている。

この伝説は、源氏物語の注釈書をはじめ多くの文献に残っている。特に有名な例は「河海抄」であり、これは江戸時代に広く利用された「湖月抄」にも引かれている。また明治十五年にイギリスで出版された初の英訳『Genji Monogatari—the most celebrated of the Japanese romances』の序文で、訳者の末松謙澄が紹介しているのもこの記事である。

ただし紫式部が実際に石山寺を詣でた記録は「紫式部日記」「紫式部集」にも存在せず、また建物の様式、実際の地理的な条件などから言っても説話の域を出ない。事実、多くの起筆伝説のうち、源氏の間の記事があるのは「石山寺縁起絵巻」のみである。

既に江戸時代には本居宣長が

(源氏物語が作られた経緯は明らかではなく諸説が存在するが)あるは石山にこもりて、かけりといひ、大般若経の料紙にかけりなどいへる、みな妄説也、(略)、又今石山寺に、源氏ノ間といふ有て、式部が像、またその机硯など、てあるは、みなかの説によりて、事好むもの、つくれる也 (『源氏物語玉の小櫛』)

と述べており、近代には芳賀矢一がこれを引いて、

さう云ふことは、皆嘘だと云ふことを、本居翁の源氏物語玉の小櫛に論じてあります。

(『国文学史十講』第五講 中古文学の二)

と語っている。時に伝承と史実の混同が問題とされた紫式部研究においても(註7)、源氏物語の成立史を扱う上で真面目に石山寺起筆伝説を採択する例は皆無と言ってよい。

しかし石山寺起筆伝説が長く人々に信じられ、今もなお近江の石山寺が「源氏物語ゆかりの地」と呼ばれることは事実である。この伝説がこれほど知名度を得た理由は様々あるだろうが、一つ言えるのは石山寺が源氏物語の「ゆかり」を大いに活用したということである。

先に述べたように、起筆伝説に「源氏の間」を加えているのは石山寺縁起絵巻のみである。また少なくとも本居宣長の生きた時代(1730～1801年)には既に式部像や調度が設置されていたことは事実であるようだ。また石山寺伝来の文化財には『源氏物語絵巻末摘花巻』(伝土佐光起筆、重要文化財)をはじめとする源氏絵、源氏物語写本、源氏物語にちなんで詠まれた和歌・俳諧などの文学作品、紫式部の肖像画・像などが数多く残っており、紫式部および源氏物語にちなんだ奉納品が各時代にわたって納められていたことがわかる(註8)。

源氏の間は遅くとも室町には成立しており、室町～江戸にかけて「源氏物語ゆかりの部屋」を見物した記録が複数残っている。一例を挙げると、江戸時代の松尾芭蕉はしばしば石山寺を訪れたが、元禄3年に「勢田に泊りて、暁石山寺に詣で、かの源氏の間を見る」という記述を残した(註9)。

また明治10年頃から20年代にかけて、石山寺が外国人に人気の観光地として栄え、それと絡めて石山寺起筆伝説が紹介されたことについて、川勝麻里の詳細な研究があるが(川勝麻里 2008)、これによると石山寺は、1877年に発表されたジョルジュ・ブスケの見聞録によって源氏物語起筆伝説と共に海外で紹介され(記述には平家物語との混同が見られ、ブスケ本人は源氏物語をよく知らなかったと思われる)、末松謙澄の『Genji Monogatari』を経て、アーネスト・サトウの『明治日本観光案内』などに紹介されたことで、観光名所としての地位を確立した。しかしその後海外における日本研究が進み、文学史の出版物が観光案内とは別に刊行されるようになった明治30年代には源氏物語と石山寺観光も切り離され、起筆伝説を観光宣伝の目玉とする石山寺への興味も薄れたのではないかと推測されている。

もちろん石山寺が人心を集めた理由は、源氏物語のみに帰すわけではない。近江八景の一つに挙げられる月の名所であり、西国巡礼の札所でもある。また平安期の観音信仰の流行によって、都に近く風景の美しい石山参詣は流行となり多くの参詣者を集めている(註10)。現在も石山寺を訪れる人のうち何%が源氏物語のゆかりを求めての参詣であると特定するのは不可能であろうし、恐らく多くの人は複数の理由をもっている。

しかし石山寺は長く源氏物語または紫式部に関する記号として機能し、現在も「源氏物語の寺」として存在しているのである。

おわりに

博物館において観光という機能が注目され始めたのは、棚橋源太郎が『博物館学綱要』の中で「観光外客の誘致、日本文化の海外紹介」を目的とする博物館の観光利用について触れ、東京や大阪など主要な観光地には日本を総合的に紹介する国立の歴史館・科学館・美術館などを設置し、地方には富士山に山岳博物館を置くなど、その地の特質を知らせるような博物館を設置する地理的配置を提案したことに始まる(棚橋源太郎 1950 pp64-71)。ここ

で言う「観光」とは、他地域からの来訪者にその土地を紹介し、理解せしめる意味合いが強い。

ただし伝統的に「観光」という言葉には物見遊山的な意味に受け取られやすく、観光を意識した施設は娯楽を優先したものになりやすいことも事実である。これは観光の現場においてもしばしば問題とされながら未だ根強い傾向であり、博物館とレジャーの関係を切り離して考えることができない現在において、引き続き考えていく必要があるだろう。

以上は文学と地域のゆかりと観光という視点から述べてきたが、博物館としての文学館を考える上では、これらの伝統と、現在の文学館の接点を探っていく必要があるだろう。博物館機能を備えた近代博物館としての文学館の始まりについても、最後に少々触れておきたい。

文学館の始まりは、個人記念館に見ることができる。現在も文学館には個人の業績を記念・顕彰する記念館の形を取るものが多いが、文学に限らずわが国における個人の記念館は、博物館および類似施設の中でも早い時期に登場している。

全国的な記念館設置の動きは、明治期に始まる古社寺類・歴史美術品の保存運動に端を発した、著名人にゆかりのある施設の保存活動に始まる。1871年の太政官布告「古器旧物保存方」に始まる一連の文化財保護運動は、明治末期から大正期にかけて保存の対象を拡大し、1919年には政府が「史跡名勝天然記念物保存法」を公布したことで、史跡・天然記念物などの保護が図られるようになった。全国的に史跡名勝天然記念物保護の動きが高まる一方で、主に郷土にゆかりのある偉大な業績・偉大な人物の記念顕彰施設としての記念館が出現している。棚橋源太郎はこういった風潮の中で、郷土研究・郷土保護の運動が盛んになったことを指摘し、

単に郷土に於ける史蹟名称天然記念物の調査指定保存に止らず、更に進んで、郷土博物館戸外博物館としてこれが教育上利用の問題が考慮せられ、遂に、城郭や偉人の住宅を開放して社会大衆の観覧に供したり、児童学生の教育に利用せられたりするに至ったのである。

と述べ、偉人宅が開放された例として山陽記念館、乃木記念館、小泉八雲記念館などを挙げる(棚橋源太郎 1950 p47-48)。また伊藤寿朗が、この時期に史跡として多くの記念館が設立され、また史跡等と未分化な歴史博物館が設立されたことで、この時期以降歴史系の博物館が博物館の主流として周知されたことを指摘しており(伊藤寿朗 1978 pp18-19)、個人記念館とは偉人にゆかりのある史跡として登場したことがわかる。

偉人を顕彰する記念館の設置は、日露戦争の終結・大正昭和の大典を関連した国家の関連事業によって大いに高揚されている。金山喜昭は、棚橋源太郎の呼びかけによる郷土博物館建設ブームの中で生まれた多くの人物記念館において、偉人の遺徳を偲ぶことによる国民の教化・思想善導が重要な動機であったことを指摘している(金山喜昭 2001 pp131-137)。当時の郷土教育においては愛郷心を育むことによって愛国心、更に人類愛の精神を涵養することを究極的な目的とする「主情的郷土教育」が支配的であり、多くの個人記念館は手本とするべき偉人の顕彰を行うことで民衆を教化することを目的としていたようである。

もっとも現在においても中川志郎が『全国人物記念館』(2002 講談社)の「監修の言葉」で

優れた業績を残した人間の一生には後代の人を魅了して止まない数々の事柄(コト)や事物(モノ)があり、名を成し現在も活躍中の人の場合はこれまでの業績や今後の展開に新たな興味が湧くのが普通である。

と述べて、個人記念館が誕生するきっかけはその「社会的需要」への対応であると語るように、記念館設立の動機は専ら過去の偉人に対する関心から語られる。大きな目で見れば文学者は郷土の偉人(偉大な業績をなした人)の一種である。個人記念館型の文学館は元から存在した記念館の形態に沿って、文学云々よりも郷土の偉人を表彰する「人物記念館」としての目的から出現したものと考えて良いだろう。

個人の記念・顕彰を行う施設は、文学館という存在が認知を得る日本近代文学館の設立以前からあり、その中には文学者に関する記念館も含まれていた。その後、日本近代文学館の設立により、文学資料の収集等を主機能とする総合的文学センターとしての文学館という概念が誕生する。現在の文学館はこういった変遷の上に成り立つのだが、その基層となる部分には、石山寺に見られるような文学作品を利用した展示・観光振興があるのではないかと筆者は考える。これについては今後も検証を行う必要があるだろう。

註

- 1 この他に「俳句文学館」「日本現代詩歌文学館」など、いずれも地域を越えて当該ジャンルの作品を対象とする専門文学館である。
- 2 駒見和夫は更に地方文学館と専門文学館からなる「文学館」と、文学者の「個人記念館」を分け、これらを総合して「文学博物館」と位置付けている（『文学系博物館小考』『和洋國文研究』40, 2005）
- 3 『日本博物館沿革要覧』に見える個人記念館の最も早い例は、1906年の鈴屋遺跡保存会(現本居宣長記念館／三重県松江市)である。国学者であり文筆家であった宣長の旧居を保存する活動は、個人を記念・顕彰する文学館活動の始まりと考えることもできる。また文学的業績を展示する意図を持つ個人記念館型の文学館は、1933年開館の小泉八雲記念館(島根県松江市)に始まる。島根県は尋常中学校の英語教師としてとして赴任した八雲が過ごした地であり、記念館に隣接して八雲の旧居も保存されている。
- 4 記号とは対象を端的に規定するイメージの集約であり、卑近な例を挙げれば「千年の古都京都」「黄金の都平泉」などがこれにあたる。
- 5 『観光白書』平成15年度・平成16年度・平成19年度・平成20年度
- 6 石山寺についての記述は、石山寺配布のリーフレットおよび次の文献を参照した野口武彦、鷲尾隆輝『古寺巡礼 近江2 石山寺』淡交社、1980
鷲尾隆輝監修、綾村宏編集『石山寺の信仰と歴史』思文閣、2008
『国寶石山寺本堂修理工事報告書』滋賀県教育委員会事務局社会教育課、1961

-
- 7 角田文衛は従来の「余りに文学的な」研究者たちの態度が式部の伝記的研究を行き詰らせ、作品研究に累を及ぼしたことを指摘する一方、1960年代の後半には研究の方法・態度についての反省が起こり、新しい角度からの調査研究が「漸く開拓的領域を脱しようとしている。」ことを評価している。(『紫式部伝の研究をめぐって』『紫式部の世界』法蔵館, 1984 p1-3)
 - 8 石山寺 2007『紫式部と石山寺』
石山寺では山頂近くにある宝物殿「豊浄殿」で、年二回春(3/18-6/30)と秋(9/1-11/30)に「石山寺と紫式部展」を開催し、源氏物語と紫式部に関係した資料や紫式部使用と伝えられる硯などの寺宝を公開している。
 - 9 石山寺境内にはその折に芭蕉が詠んだ「曙はまだむらさきにほとゝぎす」の句碑が設置されている(芭蕉翁真蹟拾遺俳諧手鑑)
 - 10 岡崎知子の研究によると、平安期の文学作品において女性たちが物詣に出かける記述で、現在残っているよう例の第2位が石山寺である(『平安朝女性の物詣』『平安朝女流作家の研究』法蔵館, 1967)

引用参考文献

- 磯原直道 2000「ミュージアムは観光の救世主か：観光型ミュージアムが示す「文化」の集客力」
月刊レジャー産業資料33巻3号(通号402号) 総合ユニコム
- 全国文学館協議会 1999「共同討議」全国文学館協議会会報No.10 全国文学館協議会
- ジョン・アーリ 1995『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと観光』法政大学出版局
- 伊藤寿朗, 森田恒之編著 1978『博物館概論』学苑社
- 梅津次郎 1963「研究資料「石山寺絵詞」」美術研究第226号 国立文化財機構東京文化財研究所
- 梅津次郎 1966「石山寺縁起絵について」『日本絵巻物全集 22 石山寺』角川書店
- 金山喜昭 2001『日本の博物館史』慶友社
- 川勝麻里 2008『明治から昭和における源氏物語の受容：近代日本の文化創造と古典』和泉書院
- 棚橋源太郎 1950『博物館学綱要』理想社
- 長谷章久 1968『日本文学と風土』講談社
- 長谷川泉 1977『近代名作鑑賞』(第五版) 至文堂
- 久松潜一 1951『新訂文学通論：方法と対象』河出書